

## Ⅶ 戦後大阪の都市改造：立体都市の実現

戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、大阪のまちは山積する都市問題への対処へと明け暮れた。駅前にふさわしい高度な土地利用と都市防災を実現する不燃化の促進をはかる再開発の実現や、あふれる人に対応した空間の確保、驚異的に増加する自動車交通をはじめ、都市交通の充実は急務の課題であった。

この時代、都市は急速に拡大したが、それは平面的な拡大とともに立体的な拡大の試みもあった。建築家、都市計画家たちはメタボリズムと呼ばれる有機的に成長する都市や建築の姿を構想した時代であった。大阪では、道路と建築の立体化や、地下空間の都市化といったユニークな試みが展開していく。

こうした時代を象徴する事業に[船場センタービル](#)（1970年：日建設計）や大阪駅前ビルといった都市の改造に取り組んだ事例がある。特に船場センタービルは、道路（築港深江線、阪神高速道路）と建築物（船場センタービル）が一体となった特別な構造をもち、その規模は建築物というスケールを超え、街と呼ぶにふさわしい。なぜ、このようなユニークな形式になったのか。理由はいろいろあるが、要約すると、①近世に成立した歴史的市街地である船場に立地していながらその範囲が戦災復興事業の対象から除外されたことにより、大阪都心を貫通する東西幹線道路が未整備であったこと、②移転に反対し、現地での商売の継続を希望する多数の地権者も多数存在したこと、③大阪万博に間に合わせるというスケジュールや高額化が想定された移転補償等の事業費に制約があったこと、などである。前例のない事業でもあり、当時は建設大臣の諮問機関と大阪市により、高層ビル案やトンネル案など様々な案が検討されたが、最終的には現在の船場センタービルの構造にたどり着いた。

東西動線の連続性や、既存街区との整合と南北動線の確保、地下鉄との円滑な接続、商業の近代化、道路線形の確保といった様々な厳しい制約のもとで、何度も案が練り直され、大阪万博に必ず間に合わせるというスケジュールのなか、船場センタービルはようやく実現に至った。

そのマッサな形状とは裏腹に、外周に沿ったポルティコの設置や、道路をまたいでビル間をつなぐ連絡通路など、歩行者動線も丁寧に工夫されている点や、地下の飲食店・居酒屋、個性ある小売店・卸売店が立体的に同居している不思議さなどその魅力も少なくない。

船場センタービルは、戦後の都市改造時代の象徴として、いまでも大阪の都心部に横た

わる。近年は、その活性化も大きな課題となっており、地域を主体にしたまちづくりも活発になっている。こうした活動を継続していくなかで、今後、再び、新たな市街地の再生方策も求められているといえるだろう。

一方で、地下を一大都市化しようとした取組みとして、戦前からのアイデアが本格的に実行に映されたのが戦後の地下街だ。昭和 20 年代後半からその構想は準備され、1957 年には難波地下街（ナンバ地下センター）の開業を皮切りに、地下街あるいはそれに類似する私有敷地内での開発が次々と展開されていった。

1962 年阪急八番街、1963 年ウメダ地下センター、1966 年堂島地下街、1968 年阿倍野地下街、1969 年[阪急三番街](#)（設計：竹中工務店）、1970 年ミナミ地下街など各地に「地下の一大新市街」が形成されていった。これらには、単に通路や店舗街としての性格にとどまらず、趣向をこらした広場が設けられた。例えば、阪急三番街は世界で初めて川の流れる街として整備され、川や池にコインを投げ込む人が後を断たず、社会現象になった。地下に張り巡らされた都市の姿は地上からの風景ではほとんどわからないが、その地下空間の吸気塔として設計されたのが、阪急前交差点に建つ[梅田吸気塔](#)だ。1963 年に村野藤吾によって設計されたこの構造物は、吸気という機能とともに、大阪駅前の玄関口、御堂筋のアイストップとなるモニュメントとしての役割も担っている。ステンレスの三次元曲面で構成されたその美しくかつ凛としたシェイプは、最先端の脱構築主義建築にもひけをとらない。

こうした都市の立体化というアイデアは建築にも取り込まれている。メタポリズムの旗手、黒川紀章が大阪万博で提案したカプセル住宅のアイデアをもとに考案された[スリープカプセル](#)（1979 年）で構成された世界初のカプセルホテルが、カプセルイン大阪だ。

都市空間のヒューマニゼーションが求められる現代においても、都市空間の立体化という手法は色あせることはない。人のための空間、にぎわう都心、回遊性といったこれからの都市が目指すべき課題でもそのアプローチは重要なアイデアを提示してくれるはずだ。（嘉名光市）



写真 竣工直後の築港深江線と船場センタービル  
(出所 大阪市開発公社所蔵資料)